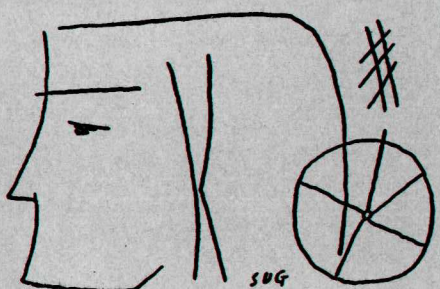
殘酷日記

小島信夫

殘酷日記



小島信夫

筑摩書房

殘酷日記

昭和三十年六月十五日　初版發行

定價　二五〇圓
地方賣價　二六〇圓

著者　小島信夫
發行者　古田晁
印刷者　田中末吉

發行所　株式會社　筑摩書房
東京都千代田區神田小川町二ノ八
電話　東京二九局七六五一（代表）
振替　東京一六五七六八

理想社印刷・和田製本

殘酷日記　目次

人　5
鬼　69
狸　95
神　115
犬　161
アレゴリーについて　岡本謙次郎　241

裴

幀

勝

呂

忠

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

殘酷日記

人

一

僕の背中に一つの中心がある氣がしていた。そいつはその夜には堪えがたいまで、中心になつていた。實は僕はその中心をもう一週間も大事にしていた。大事にしていたといつても、何も手を施したり、いたわつたりするのではなく、それがそこにあることを確かめていたにすぎないのだ。とにかく僕は喜んでいたことはまちがいない。

僕は自分のからだに惡が住み出したと思う。そいつの正體を、手でつかめる正體を、つかみたいと僕は思つていた。だから僕は背中に出來た中心を大事にしていた。そいつを培養しそいつを驅逐してやりたいと思つていたのだ。

僕はさわつて見るだけでは樣子が分らないので、僕は裸になつて鏡に背中をうつして見るが、それを見る前にもう、僕は眼をそむけてしまつた。僕は長いこと自分で自分のからだを見たことがない。僕は仔細に點檢するならば、僕のからだのいたるところに、惡の住んでいることを知るからだ。しかし今夜は、僕の求める中心は、大事にして放つて置くだけではすまないものがあつた。どうも堪えがたいまで痛んできていたのだ。それまでそいつはチクリチクリと疼いていた。少くともそい

つは外部に症狀としてあらわれてきている。心臓とか胃とかいうものとはちがう。さわることが出來るものだ。僕は思い切つて首をねじまげ、肉をつまむようにして、そいつを見た。そいつはまつたく僕の中心であるかのように、背骨の近くに噴火口のように赤くふくれあがつていた。僕は安心した。少くともそいつは外部に突起している。

外部に突起しているものほどありがたいことはない。血の汚れというようなバクゼンとしたものではなくて、ハッキリとした一點となつて盛り上つてきているのだ。それはただのデキモノとはちがう。内部から痛み、内部のなにものかを外へ押し出そうとしている。

僕はそう納得して横になつたが、大事にしているどころではなく、僕はぜんぶその中心に吸いこまれてしまうような氣がする。これは少し勝手がちがう。こんなにこのデキモノの方に僕が奪われてしまうようでは、僕というものはなくなつてしまう。これは早く何とかしなくてはならない。

そう思い出すと、今まで惡の中心だと思つて安心したものが、急に僕の生命とりになるのではないかと心配になつてきて、僕はあつちこつちの抽斗をあけはじめた。僕は大へんあわてていたので、抽斗をあけてはとじ、あけてはとじしているうちに、いつたい何をしているのか忘れてしまい、それから考え直さねばならないほどだつた。僕はそれからそれを思い出しまたその仕事をつづけた。ところがそれはどこにも見當らないので、僕は背中のことが一層腹立たしくなつてきた。僕は冷靜に一年前にさかのぼつて、それをどうしてしまつたか、考えて見なければならないと思つた。僕は

鏡を見た時よりも眞劍になつて、立つたまま考えつづけた。

僕はそれを貰つてから一度も使つたことがない。一度も使うつもりがないのは、僕が自分のからだを憎んでいるからなのだが、いつたいどうしてしまつたのだろう。次第に考えを進めて行くうちに、僕はそれを一年前に受領して鞄の前ポケットに入れたつきりにしていることに漸く氣がついた。一度も使うつもりがないのに、僕はそのカードのために毎月數百圓の金を拂わせられてきた。僕はその會社に勤めてからもう三年になるが、今まで一度も利用したことがない。僕のからだは確かに不健康なのだが、バクゼンと不健康であつて病氣にはならない。これほど僕にしてみれば腹が立つことはない。僕はまだ現在一人身であるのに、徐々に僕は病氣もせず、老いこんできている。そのために僕はそのカード――健康保險のカードを抽斗にさえ入れないで放置しておいたのであろう。

僕はそう氣がつくと、そいつをとり出してさてどこの醫者に行つたものかと思つた。僕の住んでいるのは田舍町の外れの丘の麓だが、會社からそこまでくるうちには何軒も醫者がある。僕は醫者の前を通る時には、顏をそむけるようにしてきていたが、それだけに却つてありかはよく知つていた。僕は夜になるといつも赤いランプをつけている、僕の家に一番近い外科醫のところへ行くことにした。僕の記憶ではその醫者は、醫院とは云えないほどの、ひどく所帶じみた、というより、バラックの前の一室を病室にしたような、貧相な家だつた。そこなら僕のその患部は家庭的に處理されて、つまり工場で道具が處理されるように扱われることはないであろう。僕はそう思い立つと、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

下駄をひつかけてそこを目標に一氣に坂を下りようとした。ところが走りはじめると僕の背中は火がついたように痛み、僕は立ち止つてしまい、『保險證』を持つた手で患部をぐつと押えてみた。するとそこだけが、心臟のように動悸を打ちはじめた。じつとその動悸をきいていると、僕の耳にはその動悸を破るような低いうなり聲がきこえてくるので顏をあげると、つい半町ばかり先の赤ランプの前で誰か人影があつて、それが歌を唄つているようなので、尙耳をすますと、それはインターナショナルである。いやインターナショナルのふしだが、歌詞はちがう。歌詞に氣を取られているうちに、その男は赤ランプの家の中に入りこんでしまうので、我に歸ると手の下がはげしく動悸を打つている。一刻も早く醫者に見せなければと心がせくと、さつきの歌の主が、僕が求めている相手のように思われ、その姿がなつかしくなつて僕は小走りに背中を押えながら走つた。

赤ランプの家をはじめて僕はつくづくと見るのだが、醫學士遠江廣夫と書いた看板が出ている。外科醫とは知つていたが、そこに書いてないのは產婦人科だけである。何はともあれ僕の患部は產婦人科の方面でないことは確かなので、ドアの把手をとつてあけようとするが鍵がかかつている。それではさつきこの中に姿を消したばかりなのにもう鍵をかけて寢るつもりなのか、時間はまだ八時半頃なのにと思つて聲をかけると、さつきの歌の主の聲らしいものが聞える。聞えるといつても、それはぶつぶつと冴えない聲というより、音に近いもので何を云つているか分らないが、怒つているような氣配がある。それでは時間がおそいので腹を立てているのか知らんが、そんなことを云つ

ていては醫者は勤まらんではないかと思い、尙もこんどはドアを叩くと、漸く下駄をつつかける音がしてドアがあいた。それもあくというほどではなくて半開きのまま僕の顏をのぞいている。物を云わずそうしているので、失禮な男だと思いながら、

「患者なのですが」

と云うと、

「どうして晝來ないのですか。今は夜ですよ」

と答える。

「しかし僕は急患なのですから」

「僕らは今日は疲れているのです」

「お忙しかつたのですか」

「忙しくないのですよ。僕らは今日は患者を一人も見ていない。今日は見ない日なんです」

「休診日なんですか」

僕はそう云いながら腹立たしくなり、赤ランプの光を受けている看板を見渡すと、休診日ではない。僕はそんなら何もこの醫者ばかりを當てにしなくとも、あともう一町も走つて行けば、そこにまた別の醫者がいるはずだからと思つて、默つてそちらへ向つて歩き出そうとすると、おい、といつて僕を止める。その止め方もオウヘイなので、僕は背中を押えながらふりむきもせず歩きつづけ

ると、下駄の音を立てて走つてくるなり、僕の腕をとつて、
「とにかく僕の話をきき給え。何も僕はキミを診察しないとは云わない。キミは何か落したじやないですか」
そう云われてみるとなるほど彼の拾つているのは僕の『保險證』なので、それを取ろうとすると、彼はそれを自分の手に持つたままなので、ついつられて、そのまま引返すと、
「どうせどこへ行つても休みだ」
「いつたい何だというのですか。とにかく僕は治療して貰いたいのですよ」
「それはどうせオデキでしよう。僕の家へはオデキの患者しか來ない。あわてることはないですよ。僕は話の筋の方を大事にしているのです」
そういう彼の聲は變に威壓的である。
「まあいいから上りなさい」
醫師遠江にそう云われて病室へ通されてみると、僕が外から見て感じていたところではない。ベッドが一つと消毒カンが一つあるだけで、あとは机が一脚あつてその上に藥の箱がゴタゴタとつんである。病室らしいフンイキは何もなく、その點では全く僕の思つた通り家庭的である。一寸した家ならこの位の藥箱と設備はあるにちがいない。表の看板によるとあらゆる治療が出來ることになつているが、いつたいこれは何としたことであろう。僕は茫然として自分の患部に對して濟まない

ような、自分に對しても許せぬような一抹の危惧をいだきはじめて、これならやはり外の醫者にすべきではないか、早く『保險證』を取り戻した方がよいのではないかと、その方が患部よりも氣に懸つていると、遠江氏はとにかく白い仕事衣を著てあらわれた。それがまた薄よごれているので、僕はいよいよ信用が出來ない氣持になり、

「ちよつと」

と云いかけると、彼は色の悪い細長い顏をしかめながら、

「實はキミ今日は一日中町中をどなつて歩いたのだ。僕らが自腹を切つて千圓ずつ出してトラックを雇つたのだ。それにキミ町會議員を買收するのに一人二千圓ずつだ。どなりに行かなければ二千圓とられるんだ。キミ今日はストライキなんだ」

そう云えば、會社で仕事をしていると、外をドナつて行くスピーカーや地聲が僕の患部にひびいて堪えられなかつたが、あの車に遠江氏も乘つていたことになる。僕はそれが何のための宣傳か知らなかつたので、それを聞くと健康保險の點數の引上のデモだと云う。

點數といえば、衣料の點數なら、聞きおぼえのある言葉だが、これでは何か病氣が賣物か日用品のようなかんじでピンとこない。そんなことより何より、僕は何か他人のからだのようになつている背中を出して、もう何分か前から、いつでも診察し、切るなり何なり出來るようにしているのに、專門のその仕事の方はそつちのけにして、ストライキの話ばかりしておられたのでは、いくら初夏

も間近いとはいえ、風邪をひかぬとも限らない。僕としてみれば、裸になつて自分の肌を見せているだけでも大變な恥辱と苦勞であるのに、この男は何という自分勝手な人だろう。すると彼は僕の患部に眼をつけないで僕の顏の方ばかり見て、僕がうつむいてそ知らぬ樣子をしているのに不滿でもあるかのように、僕の頭のそばに來て、

「今夜見るのはホントは違法ということになるんです。しかし見ないわけには行かないですからね。こういうものですよ、醫者というものは、いいですか、リクツ通りには行かない、大變なもんなんだ」

「だからどうだというんです。とにかく……」

「とにかく治療してくれというんでしよう。僕はあなたに周知せしめたいんだ」

周知せしめるといつたつて、こちらは僕一人だ、周知せしめるなら、それこそスピーカーでどなればいいのであつて、僕一人に何を押しつけがましいことをするのか。僕はもういよいよ待ちきれなくなつて、疲れているなら早く處置して休まれたらどうですか、奧さんだつて待つておられますよと云うと、

「あれはキミ、天使だよ。あれはキミいつまでも待つているよ。大體キミ、僕の家には患者は何人くると思う？」

僕はそれまでに奧でかすかな動靜が、うつぶせになつている僕の耳に感じられるので、氣を利か

して彼を促したのだが、彼はいよいよその言葉尻に乗つてくる模様である。僕はもう一切彼の話の相手にはなるまい、いくら天使だというほどのオトナシイ女にしたつて、こんなくどい亭主をもつた女はいいかげん愛想がつきている筈だ。そんな男にこちらがああのこうのとマトモにアイサツしておれば、こちらがバカに思われる。ところで、奇妙なことだが、僕はその時、自分の患部のことと同じていどに、奥の間の彼の妻のことに氣を使つていたのである。

二

僕はめつたに他人の家へは行つたことがなく、會社と家のあいだを往復してくらしているためか、家庭的フンイキを持つた遠江醫院のベッドの上に寢ていると、何より彼の妻の顏を見たくてならなかつたと見える。オカシナいい方だが、いや僕はその女の顏を見ずに、その女を既に愛していたと見える。僕はその見もせぬ女のために、執拗にだまつていたのだ。

「僕のところが今日ストライキをしていなくたつて、どうせ來るのはキミ一人くらいなもんだよ。いいかね、キミはこれから僕の重要な患者になるわけだ。このオデキは……」

そう云つて彼は初めて僕の患部に手をふれて、大きな聲で云つた。それは大きな聲だが、ゴミの一杯はいつたゴミ箱を地べたの上で引きずるような不快なひびきをもつていた。僕は彼が、「キミ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.